2020.11.11

新生面

「のさり」という熊本弁には、天からの授かりものという意味がある。幸運であれ不幸であれ、運命として引き受ければ生きるための糧となる。そんな強さと懐の深さを併せ持つ言葉だ▼水俣病患者の故杉本栄子さんは「私は水俣病にのさった」と語っていた。水俣病になったことで、他人の苦しみを知り、新たな人のつながりもできて人生が豊かになったという。「国も、県も、チッソも許す」という晩年の言葉は「のさり」の精神から生まれた▼自然豊かな天草を舞台に制作された映画『のさりの島』が来年公開に向けて動き始めた。京都芸術大が天草市と連携し、学生たちがプロの制作スタッフと共に手掛けた作品である。地元出身の小山薫堂さんがプロデューサーを務める▼オレオレ詐欺の旅を続けて天草にたどり着いた若者が、だますはずだった高齢女性の家で奇妙な同居生活を始める物語。天草の穏やかな時間とコミュニティーの中で、若者は自分に抜け落ちていたものに気づいていく。天草生まれの作家石牟礼道子さんの言葉も盛り込まれ、作品に深みを与える▼「主人公と同じよそ者の僕らを信じて2年間も受け入れてくれた天草には、目の前の全てを許容する『のさり』の精神がある」と山本起也監督。コロナ禍で公開が1年延びたが、これも「のさり」かもしれないという▼世界で分断や排除の動きが激しさを増し、コロナ禍は隣人さえ信用しづらい社会を生んだ。いま必要なのは、熊本の風土が育んだ「のさり」の精神かもしれない。